

戦略学序説

清水 龍 雄

論 旨

筆者は会社員人生、コンサルタント人生に続いて、第3の大学教員人生を歩みつつある。個人の人生や企業経営にとどまらず、社会の各分野で戦略の活用が求められている時代であるから、戦略の一般理論へのニーズは高まっているはずである。ところが、このテーマに関する知見は意外に乏しいのが実情である。筆者が改めて、戦略の一般理論構築に挑戦する所以である。

それには、まず戦略の一般概念の確立から始めるべきである。2(1)節において近代軍事戦略概念から現代外交戦略概念までを比較分析した。その他戦略の基礎概念をいくつかの角度から研究した旨を述べた。

次に、戦略一般理論構築のためには、分析データとして戦略思想の歴史的展開を調査すべきである。その主体となるのは、データの豊富さから見て古今東西の戦史となる事は止むを得まい。筆者による西洋の古代・中世に関する研究成果は、すでに発表済みである(2(2)節)。

本稿では3章において、主に近代プロイセン参謀本部にまつわる軍事戦略思想史研究をおこなった。その核心はクラウゼヴィッツの著書『戦争論』における戦略思想の分析であり、また彼の思想のドイツおよび他の諸国への影響の分析である。

1. 「戦略学」体系構築の意義

(1) 経営戦略が必要である

現代経営学の領域において、経営戦略論がその最先端で開拓者の役割を果たすに至っている事は、もはや異論の余地もあるまい。その背景には、変転きわまりない現代産業社会を生き抜いている企業にとって、自社の経営戦略こそが、その死命を制する最重要課題となっているという事情がある。

それ故に、応用社会科学としての経営学

が、企業の現実の経営戦略に関して、真に有効な理論を提供すべき事が、今日ほど切実に求められた事は、かつてなかったであろう。

(2) 人生にも創造が必要である

人間個人の人生について考えると、人は誰でも自分独自の人生を創造して行く事が必要であろう。いいかえれば、人は自分の人生を戦略的に生き抜く事を求められている。それを果たして行く事が、生き甲斐というものである。

筆者自身の場合を例にとれば、学校を卒業した後、まず20余年の会社員ステージがあった。この間一部上場大企業から非上場中堅企業まで数社に勤務し、職種も業務内容も、並のサラリーマンの30～40年分の多彩な経験を積む事ができた。

次に会社員の最後の数年間から重複して、他の人々に経営を教えるコンサルタントとなり、やがて独立して第2の人生を開拓し、戦略コンサルタントとして手応えのある仕事をする事ができた。近年は病気のためコンサル業は自粛せざるを得なくなったが、代って大学専任教員として特色ある教育と研究を続ける第3の人生を得ている。この世に生を受けたら、必ず世間様のお世話にならざるを得ない。どの程度のお返しをして死んで行くかが、人間としての勝負どころであろう。この意味で、以下に述べる戦略学の構築は、筆者のライフ・ワークとなるであろう。

(3) 戦略一般理論の開発

上述した個人の人生戦略や企業の経営戦略にとどまらず、人間の集団としての諸団体や諸国家などの多様に見える戦略の間に、何か普遍的な法則を発見できれば、学問的にも面白いし、現実への応用範囲も広い。これが戦略の一般理論である。

ところが筆者の知る限り、この魅力的な分野における研究成果は、意外にも誠に乏しいのである。本来ならば筆者のような実務家タイプは、すぐれた一般理論を現実に応用する事に興奮を感ずる方であるが、このような重要・緊急テーマを誰かが手がけるのを待っているいとまはない。そこで非才浅学をかえりみず、自身がこの研究を進める決意をした。

筆者の想定する戦略の一般理論体系を、仮に戦略学またはストラテジー学(Strategiology)と呼ぶ。その体系モデルは、図1のように表示できる。

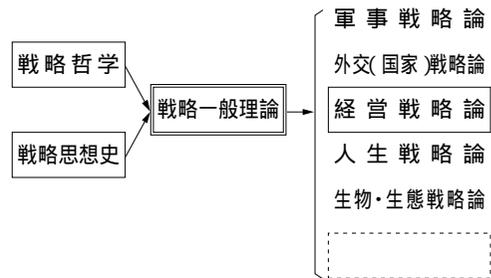


図1. 戦略学の体系モデル
〔清水龍雄, 1997〕

もし戦略一般理論の構築に成功すれば、それは人間の集団である国家や諸団体の平時・軍事戦略の分野、経営戦略の分野にとどまらず、個人の人生戦略の分野や人間を含む生物の生態戦略の分野などに広く応用し得るであろう。この他にも、さらに新しい応用分野が発見される可能性もある。

戦略一般理論という抽象理論を成功裡に構築するためには、より抽象的な「考え方」を提示してくれる、いわば戦略哲学と共に、より具体的なデータを提供してくれる、戦略思想史研究が必須であると考えられる。前者に関しては、先行する研究者が少いが、今のところ若干名の識者から直接間接に有益なヒントを与えていただいた段階である。

後者に関しては、少くとも2世紀以上の歴史を有する軍事戦略思想の研究成果と共に、古今の戦史を含む戦略事例がある。これらはデータ量としてぼう大であるので、要領よく整理して活用する事が必要であ

ろう！)

2. これまでの研究成果

筆者による、これまでの研究成果について略述する。

(1) 戦略の意義

まず、戦略学(ストラテジー学)の序論として、戦略自体の意義について検討を加えた。

戦略とは

戦略すなわちストラテジー(strategy)の語源は、遠く古代ギリシャ語のstrategos(将軍)に由来するという。しかし戦略の語が実質的な意味を持って使われ、研究されるようになったのは、19世紀のプロイセン(ドイツ)の軍人クラウゼヴィッツ(Karl von Clausewitz)の著書『戦争論』²⁾がきっかけであったと見られる。

クラウゼヴィッツの戦略概念を要約すれば、「戦争の目的を達成するために、諸戦闘を配分・結合する活動」であるといえよう。これに対比して戦術は、「個々の戦闘を指導する活動」として示される。これらクラウゼヴィッツの概念は、その後の2世紀間を生き続け、現代の戦略概念としても十分通用する。その後さまざまな戦略概念が開発されて来たが、うち現代イギリスの軍事評論家リデル・ハー

ト(Basil Liddel Hart)は、たとえば政略大戦略 純戦略 戦術の階層構造を明らかにしている。³⁾

今や現代ストラテジー学は、上述して来た軍事戦略概念を超えた、より普遍的で操作性の良い戦略概念を要求するに至っている。これに対する解答の1つとして、現代米国の著名な外交官アチソン(Dean Acheson)のものがあげられる。

「いろいろの方向を目指す行動を、主要な目的との関連性の視点から検討すること」

この定義は、筆者の企画するストラテジー学に最もふさわしいといわざるを得ない。伊藤憲一(青山学院大学)がアチソンの定義を解説して

「某時某所の限定された局面における行動指針としての戦術に対比される、手段の目的整合性を確保するための大局的判断」

と書いたのは明快である。⁴⁾

戦略の理論的基礎

戦略一般理論の基礎概念として、戦略の主体、戦略の対象、方針と政策などについて研究した。これらの成果については、豊橋短期大学紀要に発表済である。⁵⁾

(2) 戦略思想史研究 その1

戦略一般理論の構築に当たって、戦略思想の歴史を吟味する事は必須である。最も重要なデータベースは、やはり古今東西の戦争史であろう。戦争は、政治・外交・経済・

1) 以上の論述は、清水龍雄 1997、「ストラテジー学」『豊橋創造大学紀要』1:45-54を抜粋、修正したものである。

2) クラウゼヴィッツ(篠田英雄訳)1968、『戦争論(上)(中)(下)』岩波文庫。

3) リデル・ハート(森沢龜鶴訳)1971、『戦略論』原書房。

4) 伊藤憲一 1985、『国家と戦略』中央公論社:27-28。

5) 清水龍雄 1995、「戦略学序説」、『豊橋短期大学紀要』12:207-214。

経営とも不可分である。まず西欧戦略思想史については、おおむね次の通りの項目について研究した。その成果は、豊橋短期大学紀要に発表済である。⁶⁾

- ・ギリシャ歩兵
- ・東ローマとゲルマンの騎兵
- ・モンゴル西征
- ・フリードリッヒ大王
- ・ナポレオン戦争

3. 欧米戦略思想史 その2

本章は、筆者の戦略思想史研究のうち、欧米戦略思想史の第2回発表分である。内容的には、フリードリッヒ大王の後のプロイセン(ドイツ)を中心として、いわゆるドイツ参謀本部の歴史に即して検討を進めている。

なお本章の記述内容は、拙著『戦略と経営』第II部6章に加筆したものである。⁷⁾

(1) ドイツ参謀本部前史

参謀本部機能の誕生

フリードリッヒ大王の後継者は、その甥に当たるフリードリッヒ・ヴィルヘルム二世であった。彼は「大王」とちがって勇将とはいえなかったため、先王がせっかく築き上げたプロイセン陸軍の軍制も、次第にだらけて官僚化してしまった。その結果、これではいけないという危機感が諸方から盛り上って来て、新しい戦争指導機構を生み出すに至った。1787年の「最高戦争会議(Ober Kriegs Kollegium)」

の設置がそれである。会議の指導者はブルンズウィック公とフォン・メレンドルフという2人の元帥であり、形式上は従来からの高級副官部や兵站部をも統轄する事になっていた。

この2つの組織は元来その職務分掌が明確でなく、たとえば前に述べたアンハルトのように、高級副官で兵站部長を兼務するケースもあったのである。しかし両者の競合は、次第に高級副官部の優位という結果を生んで行った。兵站部が何かにつけて技術的処理に片寄せたのに対して、高級副官部の方はより総合的な参謀機能を具備するようになり、ついには最高会議を差しおいて国王に直接献策するようになって行った。ここに、実質的な参謀本部機能が動き始めたと言えるのである。

シャルンホルスト登場

父王二世死去の後を襲ったのは、フリードリッヒ・ヴィルヘルム三世(在位1777～1840)であった。彼は真面目ではあったが手腕に乏しく、ナポレオン軍がヨーロッパを席捲する中で、武装中立を維持し続ける事はできなかった。大敗の末のティルジット条約(1807)では、プロイセンは国土の半分を失い、ばく大な賠償金を支払った上、フランス「進駐軍」の駐留を許す事になった。

この頃シャルンホルスト(Gerhard Johann David von Scharnhorst, 1755～1813)は、プロイセン軍のゼネラルスタッフになっていた。彼は1801年にプロイセ

6) 清水龍雄 1996, 「戦略学序説」, 『豊橋短期大学紀要』13: 87-97.

7) 清水龍雄 1991, 『戦略と経営』清水経営研究所.

ン軍に迎えられる以前に、実務経験豊かな軍事評論家として、すでにかなり有名だったらしい。

そもそもシャルンホルストの出自はハノーバーの小作人のせがれであったから、後に将校となり、貴族に列せられ、参謀本部の責任者となり、士官学校（今の陸軍大学校に相当）の校長を務めたのは、決して彼の世渡りがうまかったからではなく、彼の智謀を時代が必要としたからに他ならない。

筆者はここで、わが国の幕末の頃、田舎の貧乏医者の子が、蘭学を修めて郷里の長州で医者をはじめたもの、ふとした事から見出されて後に官軍の総司令官・大村益次郎となって行った村田蔵六の事を思い出さずにはいられない。司馬遼太郎の小説が描くところによれば、村田蔵六の風貌は「火吹きだるま」とあだ名され、態度も村夫子然として、馬にも乗れず、隊伍の後からとぼとぼとついて歩いて行くという「総司令官」であったという⁸⁾シャルンホルストも（写真が残っているが）貴族的とはいえない団子鼻で、職業軍人らしいキリッとした態度や、号令や弁舌には無縁な男であったという。

そのシャルンホルストはハノーバー軍砲兵士官から、ポルトガル陸軍やイギリス陸軍の改革を手伝って成果を上げ、戦争実務にも熟達していた上に、いくつかの論文の著者として、また軍事雑誌の編集者としても知られた存在であった。彼

はプロイセン陸軍の改革を任される事になった。軍関係の諸学校の監督者ともなり、また陸軍部内改革の「とりで」となる陸軍会（Militärische Gesellschaft）を結成する。この会に入って来た青年将校たち クラウゼヴィッツ、グロルマン、リリエンシュテルン、ポイエなど がシャルンホルストに育成され、以降プロイセン軍の中樞を占めて行くのである。彼らはいずれも平民出身者であり、フランス軍と同様に平民の将校が平民の兵士を指揮し、愛国心によって団結して戦う時代が到来したのであった。

さて、シャルンホルストがナポレオン戦争を分析して得た戦略方針は、

- ・ 国民皆兵
- ・ 兵力集中による決戦戦略
- ・ 戦略単位としての師団編成
- ・ ゼネラルスタッフとしての参謀本部として要約し得る。時代背景に即した卓見と評価されよう。

この他にシャルンホルストの大きな貢献は、教育面であった。大量の国民軍が生まれると、新しい教育の必要性が急速に高まったからである。天才ナポレオンは、天才なるが故にゼネラルスタッフも不要、将校の教育も不要としたのであるが、自己のリーダーシップだけを頼りにヨーロッパ中を駆けまわった末に挫折した。これを反面教師としたシャルンホルストは、Militärakademie（士官学校または陸軍大学）の校長として本腰を入れて教育に注力した。彼が教えた事のうちに、

8) 司馬遼太郎 1976、『花神』新潮文庫。

戦争の技術についてはいうまでもないが、特に戦争の倫理を強調した事は、注目に値する。戦争の悲惨を体験して来た本物のキリスト者として、独自の非戦思想を展開したのである。

マッセンバッハ

マッセンバッハ(Freiherr Christian von und zu Massenbach)中佐は、兵站幕僚でありかつ陸軍会メンバーであった。彼が1802年に書き上げた統合参謀本部案は、いわゆるマッセンバッハ・プランとして有名である。この提案が後にプロイセン軍参謀本部として実を結ぶ事になるのであるが、その内容はおおむね次の4点に集約される。⁹⁾

第1は、これまで臨時編成であった参謀本部機構の常設化である。そしてそれは戦時には勿論、平時においても軍事計画センターの機能を果たすべきである。彼はプロイセンの地理的条件から見て、対オーストリア、対フランス、対ロシアの3担当グループにおいて、作戦計画を常時検討するよう説いた。戦略シナリオを常備するよう提案した点は、注目に値する。

第2は、参謀将校の教育の重視である。特に必須科目として、平時における旅行(Reisen)を提案し、国内外の地理と人心を熟知させよと勧めているのは面白い。

第3は、参謀将校と隊付将校の定期的な交替である。即ちラインとスタッフのローテーションによって人材の育成をはかるうという事であり、現代の組織原理を先取りしているといえよう。

第4は、参謀総長の「帷幄上奏権(いあくじょうそうけん)」(Immediatvorträge)の提案である。即ち参謀総長はいつでも国王に直接面会して、意見を述べる事ができるというものである。この提案は、さすがに大議論を巻き起し、長い間却下され続けた。これが実現したのは、ずっと後の1883年のことであり、当時81歳のオットー・フォン・モルトケに対してはじめて許されたのであった。帷幄上奏権はどの国においても双刃の剣である。昭和期の日本において、軍部の独走を許して大東亜戦争にまで立ち至らせた一因がこれであった。

さて国王はこのマッセンバッハ・プランの価値を認め、多くの反対をも押し切って、1803年から兵站幕僚部を改組してその長であるマッセンバッハの権限を拡大し、最高戦争会議の軍事部門と技術部隊の長をも兼任させた。そして21名の将校を3班に分け、仮装敵国別の戦略シナリオを分担作成させた。

フォン・グナイゼナウ

プロイセン帝国において、実際に国民皆兵令が発布されて新国軍が発足したのは、1813年の事であった。参謀本部という組織も、正式にこの時に発足した。初代参謀総長はシャルンホルストであったが、彼は就任数ヵ月後に戦傷によって死んでしまった。

2代目の参謀総長は、フォン・グナイゼナウ(August Wilhelm von Gneisenau)である。彼はオーストリア軽騎兵の出身であり、1786年にプロイセン軍に加わってから約20年間というもの、冷や飯を食わ

9) 渡部昇一 1974、『ドイツ参謀本部』中公新書：59-60。

され続けたのであるが、その間徹底的に軍事戦略を研究し、遂にシャルンホルストの首席幕僚となっていた。人々は、彼の事を「シャルンホルストの聖ペテロ」とあだ名したという。つまりキリストにおけるペテロのように、シャルンホルストの最も忠実な弟子であり、後継者であったという事である。

フォン・グナイゼナウは、司令官の決定に対する参謀長の共同責任という新しい原則を打ち立てた。同時に軍参謀長は、どうしても司令官と意見が合わない時には、参謀総長に訴え出る事ができるとした。これにより、軍の運用は以前よりもはるかにスムーズになったという。そのおかげか、プロイセン軍はナポレオンを相手にしばしば苦戦をしたものの、最終的にはこれを打倒する事ができたのである。

グナイゼナウは、中央の作戦目的が現地部隊に正確に伝えられる事が、戦いの勝敗を左右する重大事である事に気づいていた。そこで彼が改善した事は、中央からは作戦意図を誤りなく伝達する事、戦術的決定は各師団司令官に権限を委譲する事、命令のあいまいさを避ける為に、所定の形式と迅速な伝達をシステム化した事である。

命令の伝達のあいまいさの為に作戦の成否が左右される事は、現代の戦争に至っても全く変わる所がない。1つだけ例をあげれば、大東亜戦争のレイテ海戦において、連合艦隊司令部の作戦意図が栗田艦隊に正確に伝わっていなかった

結果、栗田艦隊のいわゆる「謎の反転」により、日本海軍部隊は大損害をこうむる事になった。学者達によるプロジェクト・チームがこのレイテ海戦の失敗について、「より根本的問題として、作戦の立案者と遂行者の間に戦略目的について重大な認識の不一致があった」¹⁰⁾と指摘している通りである。

グナイゼナウは、1813年に全プロイセン軍の参謀総長となって対ナポレオン戦略を立案した。彼の戦略方針はナポレオンの大軍に対する決戦を避け、徹底した消耗戦を敵に強いるというものである。この年の8月から10月までの間、多数の戦闘を通じて、彼はこの戦略方針を完全に実施する事に成功した。そのおかげで、いわゆる「ライブツィヒの諸国民の戦い」に勝利する事ができ、翌年ナポレオンを退位に追い込むことができたのである。

(2) クラウゼヴィッツ登場

クラウゼヴィッツの経歴

プロイセンの陸軍大将であったクラウゼヴィッツ(1780~1831)は、その名著『戦争論(Vom Kriege)』において述べた深遠な戦争哲学によって、今日なお有名である。その余りの有名さの為か、かえって「数多く引用されるが、読まれる事の少ない」古典であると評されている。

クラウゼヴィッツははじめプロイセン陸軍に入隊したが、一時は帝政ロシア軍に参謀中佐として勤務した事もある。後に再びプロイセン軍に戻り、1815年の

10) 戸部良一・寺本義也・鎌田伸一・杉之尾孝生・村井友秀・野中郁次郎 1984、『失敗の本質』ダイヤモンド社：149。

ワートルローの戦いでは、プロイセン軍司令官ブリュッヘルの参謀長シャルンホルストの幕僚として戦闘に参加している。この間の敵は一貫してナポレオンであって、クラウゼヴィッツにとってナポレオン戦争の戦場は、苦しいが実に多くを教えてくれる教室だったのである。

戦後は12年にわたってベルリンの陸軍大学校長を務め、後進の指導にあたった。この間に彼は自分の体験した諸戦争を分析し、十二分に抽象化した結果を原稿に書き残した。その後彼はグナイゼナウ元帥の参謀長となり、1831年に没した。

彼の死の翌年から未亡人の手で遺作集が刊行された時、編さんされて『戦争論』の名で世に出たのである。¹¹⁾『戦争論』は難解と評される事があるが、その理由の1つには、原稿が未完成で、必ずしも十分に体系化されていない事もあるかもしれない。

『戦争論』の優越性

19世紀後半にオーストリアとフランスという2大陸軍国が、プロイセンによって短期間に粉砕されるに至ったのは、クラウゼヴィッツの『戦争論』によってであったといっても過言ではない。当時のヨーロッパではジョミニ(A. H. Jomini)の『戦争術概要』が争って読まれており、クラウゼヴィッツの方は、プロイセン参謀本部以外には知られていなかったという。ジョミニによって教育されたのは、

オーストリアやフランスだった。

「そしてその決算は、それから約30年後の普墺戦争と普仏戦争とに現われる。……つまり深遠な戦争哲学を学んだプロイセンは勝ち、哲学抜きに戦争術を学んだオーストリアやフランスは完膚なきまでに敗れたのだ。まことに深き思想の力の大きい事は、恐るべきものと言わねばならない」¹²⁾

『戦争論』の基本姿勢

クラウゼヴィッツの『戦争論』は、岩波文庫版のほん訳本でも1,200ページ余という大部である。¹³⁾彼の遺著全10巻のうち、3巻分に相当する。未定稿でもあり、ある種難解でもあったこの書物が次第に不朽の名著とされるに至ったのは、戦争に関する本質的かつ科学的な研究だからである。彼の研究姿勢は、何よりもまず戦争の本質の究明にあった。戦争という現象を抽象化して、その中から普遍的な法則を発見しようとしたのである。

次に、理論と実務経験の間の差異や矛盾の止揚をはかろうとした姿勢が目立つ。彼自身が次のように記している。

「研究と観察、理論的思考と経験とは、互いに軽蔑し合ってはならない。まして排斥し合うべきではない。理論は経験を保証し、経験は理論を保証するのである」¹⁴⁾

ジョミニの『戦争術概要』がまるでハウツー本の趣があったのと、まさに対照的である。

さらにクラウゼヴィッツの特色は、戦争の全体像を、その部分との関連におい

11) P. パレット(白須英子訳)1991、『クラウゼヴィッツ』中公文庫：489。

12) 渡部昇一 1997、『ドイツ参謀本部(新版)』クレスト社：124。

13) クラウゼヴィッツ(篠田英雄訳)1968、『戦争論(上)(中)(下)』岩波文庫。

14) [クラウゼヴィッツ,1968]: 著者序文。

て分析しようとしている事である。戦争をトータルに把握しようとする彼の方法論は、筆者の構想するストラテジー学にも、多くの示唆を与えてくれるに違いないのである。

『戦争論』の目次構成は次の通りになっている。

- 第1篇 戦争の本性について
- 第2篇 戦争の理論について
- 第3篇 戦争一般について
- 第4篇 戦闘
- 第5篇 戦闘力
- 第6篇 防御
- 第7篇 攻撃
- 第8篇 戦争計画

このうち第1・第2篇は戦争本質論、第3・第8篇が戦略論、第4～7篇が戦術論と区分する事ができる。『戦争論』全体の重点が戦争本質論にあるとする向きが多いが、たとえば井門満明（元防衛研修所）のように、戦略論こそがクラウゼヴィッツが最も関心を抱いていた問題であったと、彼の執筆メモの分析によって立証した論者もある。¹⁵⁾

『戦争論』の主張

クラウゼヴィッツは、みずから実戦体験したナポレオン戦争と、それ以前のいわゆる地形重視時代の戦争形態とを統合した戦争思想を打ち樹てた点が卓越している。この事は、時代と共に変化して行く要素と、時代を超えて普遍妥当する原

理がある事を明らかにしたという意味である。あたかも松尾芭蕉の名言「不易流行」を地で行くようなものである。

カントやヘーゲルなどドイツ観念論哲学者達の影響も大きく、戦争の本質論を徹底追求しているところなどは、時代を超えた古典としての価値を保っている所以である。従って、クラウゼヴィッツが「現代戦略思想の正統派の源流」と評されるのも無理はない。特に近代総力戦の理論がはじめて姿を現わしたのが、この『戦争論』においてである事は、注目に値しよう。¹⁶⁾

2種類の戦争

クラウゼヴィッツは戦争を定義して「戦争は一種の強力行為であり、その旨とするところは、相手に我が方の意思を強要するにある」¹⁷⁾と述べている。この定義を立てるについて、彼がおこなった分析を要約すれば、大凡次のようになるであろう。彼が「それぞれ目的を異にする二通りの戦争の区別」¹⁸⁾があると記しているのがそれである。

その1は、戦闘現象から見て、戦争が暴力の無限界性を有することである。即ち「戦争は一種の強力行為であり、そしてかかる強力行為には限界が存しない」¹⁹⁾という認識である。後の人は、これをクラウゼヴィッツの「絶対戦争観」と呼んでいる。

他方、戦争の現実をトータルに観察す

15) 井門満明 1982, 『「戦争論」入門』原書房: 5.

16) [伊藤憲一, 1985]: 81.

17) [クラウゼヴィッツ, 1968] 上巻: 290.

18) 前掲書 上巻: 13.

19) 前掲書 上巻: 32.

ると「戦争は政治におけるとは異なる手段をもってする政治の継続にほかならない」²⁰⁾と彼はいう。ここでは戦争は、当の政治目的を達する程度に応じて制限されるのが当然なのである。

これら2つの見解は相互に矛盾しているのであるが、彼自身も「まことに戦争はカメレオンさながら」と記しているように、その両者共に正しく戦争の属性なのである。²¹⁾従って後世彼の絶対戦争観の部分のみをとりあげて、クラウゼヴィッツは戦争狂であったかの如くに評する者が出たのは、全くの曲解といわざるを得ない。クラウゼヴィッツはこの深刻な矛盾を、あたかもヘーゲルのように止揚する(aufheben)事を目指すのである。彼はまた「戦争のような危険な事業においては、善良な心情から生ずる謬見こそ最悪のもの」²²⁾とも記しており、平和を唱えさえすれば平和が到来するというのが如きエセ平和主義者を戒めているのである。

戦略の手段性

クラウゼヴィッツの戦略思想は、これを大戦略的視点から見ると、上述の通り「政治の延長」であると認識するところにある。そして戦争は「政治的目的を達成するに適切な手段」²³⁾であるという事になり、又目的の達成の為には、適切な中間諸目標を設定すべきだということにもなる。更に「戦争においては目標に達する

道が数多くあるという事、すべての戦争が必ずしも敵の完全な打倒を旨とするものでない」²⁴⁾事が明らかにされる。

ここには、我々が探求しつつある戦略一般理論への重要な手がかりが発見されるのである。即ち、一般に戦略策定は、目的達成の為に中間的に選ばれる適切な諸目標に到達すべく、多数の戦略代替案を検討し、比較評価し、選択して行く手続きをいうのであるということが証明されるのである。

さらに戦闘力は、それが行使されない場合においても、心理的效果を敵に与え続ける事が可能である。これが、現代世界でも議論がまびすしい、軍事力の戦争抑止効果である。その代表例が戦略核兵器の抑止力であり、米ソ2大国の冷戦が熱戦に転化する事を、かろうじて防いで来たのであった。

ちなみに戦略核は、第二次世界大戦時にアメリカが組織的に開発した戦略爆撃が、ICBM(大陸間弾道ミサイル)に核弾頭を装着するというアイディアに連なって行ったものである。ついでにいえば、都市の無差別爆撃をはじめて実験したのはドイツ軍(1938年、ゲルニカ)であり、これを戦略爆撃として制度化したのは、実は日本軍(1939年、重慶)であったのである。²⁵⁾

またクラウゼヴィッツは『戦争論』の第3篇において、戦略の5要素として精神

20) 前掲書 上巻：58。

21) 前掲書 上巻：61。

22) 前掲書 上巻：30。

23) 前掲書 上巻：63。

24) 前掲書 上巻：74。

25) 前田哲男 1988、『戦略爆撃の思想』朝日新聞社：14。

的・物理的・数学的・地理的および統計的要素をあげると共に、これら諸要素をバラバラにではなくトータルに運用するのが戦略であると主張している。²⁶⁾その中でも特に、精神的要素としての将帥の才、軍の武徳、軍における国民精神を重視しているのが特徴である。次いで物理的要素とは主として兵力の優位など、数学的要素とは作戦線の角度や部隊運動などの幾何学的価値、地理的要素は、地形や道路など、また統計的要素とは兵站的資料などを指している。

「摩擦」の概念

クラウゼヴィッツが戦争の定理の1つとして「摩擦(Friktion)」というユニークな概念を打ち出している事は注目に値する。「戦争においては、机上の計画ではとうてい考えられないような無数の小さな事情のために、一切が最初の目算を下まわり、所定の目標のずっと手前までしか達しないのが通例である」²⁷⁾と記されている通りである。

また「戦争における行動は、いわば重たい媒体の中での運動のようなものである。極めて自然的で単純な運動、即ち単に前進する事でも、水中では軽捷、正確に行う事ができない」²⁸⁾と記されている通りである。

ここでは机上の戦争計画が、タタミの上の水練と同様に現実の中で裏切られるという事を、クラウゼヴィッツはみずか

ら生命を張って戦場を駆け回った経験をも踏まえて述べているのである。

「摩擦は、現実の戦争と机上の戦争とをかなり一般的に区別するところの唯一の概念である」²⁹⁾

と記している通りである。

筆者が類推するには、経営戦略の分野でかつて流行した分析型戦略形成の旗色が最近悪くなっているのは、企業と環境との間の摩擦を軽視したからではないか。乱気流³⁰⁾(アンゾフによる)とも評される環境変化に対して、状況適応(contingency)を戦略に組み込んで行く事が必要であろう。³¹⁾

(3) クラウゼヴィッツの影響

ドイツ本国への影響

19世紀のプロイセン「国民軍」は、軍隊には未経験の青年達を徴兵し、これを早急に一人前の軍人に仕上げて行く事が急務となった。という事は即ち、軍人の育成を実施する将校の育成も急務となったのである。その際に最も重要な教科書が、『戦争論』であった。なぜならば、このテキストが初めて戦史研究を軍事科学の域にまで高めたからである。『戦争論』があったからこそ、大モルトケらはプロイセン陸軍を当時世界一の軍隊に育成し、新興ドイツ帝国の誕生(1871)に寄与し得たのであった。この頃になると『戦争論』の名声は諸外国に聞こえ、英・仏・露語な

26) [クラウゼヴィッツ,1968] 上巻:266ff.

27) 前掲書 上巻:134.

28) 前掲書 上巻:134.

29) 前掲書 上巻:134.

30) I. アンゾフ(中村元一・黒田哲彦訳)1990、『最新・戦略経営』産能大学出版部:25ff.

31) たとえば清水龍雄 1995、『戦略経営』学文社:第15章など参照。

どに次々とほん訳されて行った。

20世紀に入って第一次世界大戦にドイツが敗北すると、『戦争論』の名声も低下し、世界的には「教科書」の役割を終えて「古典」の仲間入りをした。ただし敗戦国ドイツにおいて、厳しい軍備制限の下でフォン・ゼクトらが再軍備を目指し、大学での秘密軍事教育に注力し、やがてヒトラーが出現してドイツは再びヨーロッパの中で最強の軍隊を保有するに至った。この「快拳」の裏に、『戦争論』の思想が継承されていた事は想像に難くない。

第二次大戦後の西ドイツにおいても、クラウゼヴィッツ協会(1961～)などにおいて『戦争論』の地味な研究が横行されて来た。ただしドイツ以外のヨーロッパ諸国では、核武装の世界でクラウゼヴィッツのいう「政治の優位」が保てるか否かという論争を呼んだといえるであろう。

ソ連への影響

ロシア革命を成功に導いたエンゲルス(Friedrich Engels)は、自身が「将軍」とあだ名されるほどの軍事通であったが、『戦争論』を熟読して共産主義革命理論に織り込んだ事は、疑う余地がない。彼はクラウゼヴィッツの事を「軍事科学の一等星」と呼び、最大級の賛辞を捧げている。³²⁾エンゲルスによる『戦争論』訳注書が残っているが、彼はこれを使ってソ連共産党幹部を教育したのであった。このようにして、『戦争論』はソヴィエト連邦の軍事戦略思想の出発点となっている

のである。

しかし共産主義革命成功後のソヴィエトにおいては、党機関以外でのクラウゼヴィッツ研究は次第に禁止の方向に向かう。現政権を脅かしかねないほど実効性ある理論であると、暗黙裡に認められた事になるのか。

米国への影響

ブラグマティズムの国である米国で、クラウゼヴィッツの哲学的軍事理論が人気がなく、むしろジョミニがもてはやされたのはうなづける。事実ジョミニは南北戦争の最中に、南軍、北軍の双方から招待されて訪米している。シーパワー理論で有名なマハン提督とも友人であった。しかしクラウゼヴィッツによる、政治が軍事に優先するという「文民統制」の思想は、アメリカ人気質には合っているはずである。

20世紀に入って、米国は2次の世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争と引き続いて大規模戦争に参加して来たのであるが、米国は基本的に徴兵制は戦時中のみであり、平時は志願兵制を採用している。従って職業軍人の層は薄い。その代りに、民間人による軍事研究は盛んである。

ついでながら、物量とハイテクを除いた人間としての兵士として評価すると、アメリカ兵は世界の弱兵であり、ドイツ兵にも日本兵にもベトナム兵にも負けるといのが定評である。たとえば第一次大戦に参戦しフランスに上陸したアメリカ軍はドイツ軍に全く対抗できず、フランス軍に作戦指導を委任してやっと戦った

32) 長谷川慶太郎 1983、『戦争論を読む』PHP研究所：106。

のである。当時連合側であった日本帝国陸軍はフランス戦線に観戦武官を多数送り込んでいたが、彼等はずぶさにアメリカ軍の弱さを実見し強く印象づけられたという。これが後の大東亜戦争において、わが軍が米軍を見くびって失敗する遠因となったと指摘されている。³³⁾

軍隊組織については、米国はドイツから多く学んでいる。たとえば現在のペンタゴン(国防総省)は、ドイツ参謀本部に範を求めたものといえる。とすれば、クラウゼヴィッツの間接的な影響下にあるともいえるようか。

米国の最高指導者の中でクラウゼヴィッツの唯一の理解者とされるのが、アイゼンハウアー(D. Eisenhower)である。³⁴⁾彼アイクは第二次大戦中ヨーロッパ戦線総司令官としてその能力を発揮する。戦後は米大統領に当選したが、軍人当時とちがって、地味で平凡な大統領だったと評された。

しかし近年になって、当時の外交・内政文書が公開されたりして研究が進み、アイクが朝鮮戦争の停戦や国防費の支出規制になかなかの手腕を発揮したなど、その評価は好転している。軍事力の自己目的化を排除し、冷戦の目的はソ連に勝つ事ではないと力説して軍事費の無用の拡大や軍産複合体に警告を与えたアイクの発言は、実は彼がクラウゼヴィッツ流の優等生であった事を示しているのである。

ピーター・パレット(Peter Paret)(スタンフォード大学)は現代米国におけるクラウゼヴィッツ研究の権威と目されるが、彼はクラウゼヴィッツが探求して止まなかった「戦争とは何か」の問題は、核の現代においてむしろその重要性を増していると指摘している。³⁵⁾世界における核のチャンピオンとしての、米国の立場をも同時に代弁しているともいえるようか。

ついでながら、フリードマン(G. Friedman)(ルイジアナ州立大学)はその近著において、「湾岸戦争」における米空軍の予想外ともいえる大勝を解説して「クラウゼヴィッツの空軍」という節を設けている事が注目される。³⁶⁾

「それ以前の理論家は空軍力は産業基盤や社会組織まで攻撃すると考えていたが、湾岸戦争の際、空軍の戦術立案者はこの仮定に反対して、昔ながらのクラウゼヴィッツ流戦争論に回帰した。クラウゼヴィッツにとって軍事力の最大目的は、敵軍の戦闘能力を粉砕する事だった」

すなわちベトナム戦争における北爆の大失敗から、今回の湾岸戦争までの間に、米軍の航空戦理論が大変革が発生していた事の反映である。それは、本稿筆者の表現によれば、同じ爆撃であっても、「じゅうたん」から「ピンポイント」への変化だったのである。その裏には、情報技術の革新による兵器と戦闘技術の大変化がある事も事実である。

33) 前掲書：126。

34) 永井陽之助 1985、『現代と戦略』文芸春秋社：150ff。

35) P. パレット「クラウゼヴィッツ」1989、『現代戦略思想の系譜』P. パレット編(防衛大学校「戦争・戦略の変遷」研究会訳)ダイヤモンド社：167。

36) フリードマン, G & M.(関根一彦訳) 1977、『戦場の未来』徳間書店：265。

わが国への影響

わが国は明治期の帝国陸軍の指導者として、ドイツ参謀本部からメッケル少佐を招いた。当然メッケルはクラウゼヴィッツに学んでいた訳だが、メッケル自身が不肖の弟子であったか、又は彼に学んだ日本陸軍が無能であったかは別としても、メッケルは戦術面を中心に指導し、日本陸軍は以後戦略軽視の気風を養って行くのである。

『戦争論』の和訳については、明治20年代にドイツ留学中の軍医森林太郎(鷗外)が開始している。しかし完訳には到らず、後年陸軍士官学校のスタッフが完訳した。『戦争論』の哲理は、わが国の軍部内では戦術論中心に曲解誤用され続けたのが真実のようである。

日清戦争、日露戦争にはからずも勝利して自信をつけたわが国は、本来「島国」であったものが朝鮮・満州・支那大陸へと「大陸国家」への途を歩んでしまうという、大戦略的誤りをおかしたのである。この途は、同時に軍事に関して欧米から学ぶ態度を棄てて行った、唯我独尊と孤立への途でもあった。

さらに国内では、軍事に関する研究は軍部に限られ、大学等の研究者が軍事に触れる事は禁止された。この為本来の軍事評論家は、わが国では大東亜戦争の敗戦に到るまで存在しなかったのである。その事は同時に、軍人の知的退廃を国民の目からおおい隠したといえる。³⁷⁾わが国で『戦争論』を最も真面目に勉強したのは、非合法の共産主義革命家達であっ

たと推測される。

敗戦後に到ると、軍事に関する研究はおしなべて敬遠されたため、戦後50余年の間見るべき成果はない。今後諸家の研究推進に期待したい。経営関係においても、戦略というコトバの過多に反して、戦略の曲解誤用が目立つ。かつての軍部のような、亡国への途に再び迷い込む事のないよう望みたい。

大モルトケの登場

クラウゼヴィッツの名を全ヨーロッパに広く知らしめたのは、大モルトケ(Helmuth Karl Bernhard Graf von Moltke, 1800 ~ 91)がドイツ参謀総長に就任し、クラウゼヴィッツの軍事思想を応用してオーストリアやフランスを派手に打ち破ったという現実であった。この事は同時に、ドイツ参謀本部をも、大モルトケその人をも有名にした。クラウゼヴィッツ自身は、直接に参謀本部の組織形成に関与したのではないが、グロルマン、ミュフリンク、クラウゼネッツ、ライヘルと続く参謀総長達に深い影響を与え、大モルトケにまで連なっていると考えてよい。

大モルトケが保守的な老国王ヴィルヘルム一世の下で、オーストリア・フランスという当時の2大軍事国を打倒し得たのは、当時のビスマルク首相、ローン軍事相の理解があり、十分に腕をふるう事ができたからであった。

個人としての大モルトケは、筋骨たくましい軍人タイプとは正反対の、いわば文士タイプだったというから面白い。

37) [長谷川慶太郎, 1983]: 158.

モーツァルトを愛し、読書が好きで、42歳になってから16歳の娘と結婚して甘い家庭生活を送っていたというのである。本物の戦略スタッフの中に、時々この種の人物が出るものである。彼の経歴は親王付きの侍従武官が永く、57歳の時に突然参謀総長（当初は代行）に任ぜられたのだから、周囲の人々はもちろん、本人もびっくりしたのではなからうか。なにしろ今まで一度として、部隊指揮官というものをやった事がないのである。

ここで筆者は、イトーヨーカ堂社長兼セブン・イレブン・ジャパン会長である鈴木敏文を思い出す。彼はヨーカ堂グループの名参謀であり、セブン・イレブンをゼロから日本一に育てた社内ベンチャー経営者である。その彼は、スーパーやコンビニの売場に立った経験がないというのである。³⁸⁾

大モルトケの功績

大モルトケがクラウゼヴィッツの真の後継者であったという事に、今日疑いをさしはさむ者はいない。外交に関してはピスマルクに一任して口を出さず、純戦略の展開に全力をつくした態度は、軍部の首脳として模範的であったといえる。以後ドイツその他諸国に輩出した参謀達は、しょせん大モルトケのエピゴーネン（亜流）でしかなかったといっても、あながち暴言ではないであろう。

大モルトケは参謀本部組織を拡大強化すると共に、本部を改組して仮想敵国ごとの担当班を置いて平時から情報収集に

つとめ、多数の戦略シナリオを作成検討していた。また彼の代になって、懸案であった「帷幄上奏権（いあくじょうそうけん）」の獲得を実現し、統帥の独立、指揮の統一原則を確立した。

また鉄道部を設置し、電信技術の開発をうながし、兵器の改良にも力を注いだ。総じて当時のハイテクを、大胆に採用していった人である。用兵の面では、参謀本部の戦略的計画の権威を高めるよう努めると共に、第一線の指揮は現地司令官に任せるといって、近代的な計画と運用のパターンを創出した。

このように大モルトケとその参謀本部があまりに華々しかったせいか、それ以後の参謀総長にはあまり有能な人物が出ていない。

その後のドイツ参謀本部

大モルトケ以後の参謀本部組織は、戦争が終ってからも肥大し続けた。彼が参謀総長代行になった1857年に本部将校は64名であったが、1888年に参謀総長を辞する時には、本部将校は239名（3.7倍）にふくれ上っていたという。いわゆるパーキンソンの法則そのものであった。ちなみにパーキンソン自身がイギリスの軍事史家だったというから、官僚組織の肥大化は軍隊でも例外ではないらしい。³⁹⁾

大モルトケの後、ヴァルダービーを経てシュリーフェン（Alfred Graf von Schlieffen, 1833～1912）が参謀総長に就任した。有名なシュリーフェン・プランの策定者で

38) 緒方知行 1993『実証研究イトーヨーカ堂グループのニューリーダー 鈴木敏文の経営』TBSブリタニカなど参照。

39) [渡部昇一, 1997]: 178.

ある。彼のプランは、モルトケの1正面作戦と異なり、仏露2正面に対する短期決戦主義がその特徴である。この戦略は彼自身の任期中には実施の機会がなくて次の小モルトケに引継がれたのであるが、

第一次世界大戦でこの戦略プランを小モルトケが「水で薄めた」結果、非現実化して失敗に終わったというのが、専門家筋の一致した見方である。⁴⁰⁾

参考文献

- 1) アンゾフ, I.(中村元一,黒田哲彦訳)1990,『最新・戦略経営』産能大学出版部。
- 2) 伊藤憲一 1985,『国家と戦略』中央公論社。
- 3) 緒方知行 1993,『実証研究 イトーヨーカ堂グループのニューリーダー 鈴木敏文の経営』TBSブリタニカ。
- 4) クラウゼヴィッツ, K.(篠田英雄訳)1968,『戦争論』(上)(中)(下)岩波文庫。
- 5) 司馬遼太郎 1976,『花神』新潮文庫。
- 6) 清水龍雄 1991,『戦略と経営』清水経営研究所。
- 7) 清水龍雄 1995,『戦略学序説』『豊橋短期大学紀要』12。
- 8) 清水龍雄 1996,『戦略学序説』『豊橋短期大学紀要』13。
- 9) 清水龍雄 1997,『ストラテジー学』『豊橋創造大学紀要』1。
- 10) 戸部良一・寺本義也・鎌田伸一・杉之尾孝生・村井友秀・野中郁次郎(共著)1984,『失敗の本質』ダイヤモンド社。
- 11) 永井陽之助 1985,『現代と戦略』文芸春秋社。
- 12) 長谷川慶太郎 1983,『戦争論を読む』PHP研究所。
- 13) パレット, P.『クラウゼヴィッツ』1989,『現代戦略思想の系譜』P.パレット編(防衛大学校「戦争・戦略の変遷」研究会訳)ダイヤモンド社。
- 14) パレット, P.(白須英子訳)1991,『クラウゼヴィッツ』中公文庫。
- 15) フリードマン, G & M.(関根一彦訳)1977,『戦場の未来』徳間書店。
- 16) 前田哲男 1988,『戦略爆撃の思想』朝日新聞社。
- 17) リデル・ハート, B.(森沢亀鶴訳)1971,『戦略論』原書房。
- 18) 渡部昇一 1974,『ドイツ参謀本部』中公新書。
- 19) 渡部昇一 1997,『ドイツ参謀本部』(新版)クレスト社。

40) 前掲書:200。